

実習生と共に問い直す「共創的学び」の姿



もうすぐ教育実習が始まります。私たちが「共創的学びのシナリオ」を作成するように、実習生は指導案（場合によっては細案も）を作成します。私自身が学生だった時も経験があるのですが、学生は「指導案には発問や板書計画を詳細に記述しなさい」と指導されるものです。しかし、いざ授業が始まると「指導案に固執せず、子供の状況をよく見なさい」と言われ、放課後の研究会では「あのときの発問は指導案と違いましたね」と突っ込まれる。この矛盾のような状況に、当時学生だった私自身どうしたものかと考えたものです。

そして教員になり、今度は自分が指導する立場になってからも、実習生に対して同じように「ここはもっと細かく計画を書きなさい」と指導していることに気づきます。そのとき、かつて自分が抱いたあの「指導案をめぐる矛盾のような事態」を、今まさに自分が作り出しているのではないかとふと考えることがあります。

かつて、本校の先輩の先生から教わった言葉が思い出されます。

「授業はライブである。事前授業という考え方は避けるべきで、事前（の練習）をしてはいけない。」

当時はその言葉の真意を測りかねていましたが、今なら少し分かる気がします。

あらかじめ決めた通りに子供を動かすような「予定調和の授業」は、本当の学びではないということです。

この事態について、ルーシー・A・サッチマンの著書『プランと状況的行為』の監訳者を務めた佐伯胖氏は、その「あとがき」の中で次のように述べています。

つまり、「プランとは、人間行動を“導く”プログラムではない」、「人間行動は、その場の周辺的な環境条件とその変化に、その都度的に対応するものであり、まさに、状況に埋め込まれたものなのだ」、「プランというのは、他人に自分のやったことを説明したり、言い訳をするためには有効ではあっても、人間行動を生み出すモトなどではない」とされ、そして、「プランというのは、人間行動にとってたんなる“資源（リソース）”なのだ」ということを知る（中略）この「プラン即リソース」論は、私たちを「プランの奴隷」から解放してくれるだけでなく、本当の「プラン」の活用がどのようなものかを示してくれる。

佐伯胖氏のこの「プラン即リソース」論は、「指導案って本当は何のためにあるのだろう」という根本的な問いにヒントをくれています。

本校の研究に寄せて考えるなら、指導案は「その通りに進めなければならない正解」ではなく、授業の中で子供と教師が一緒になって迷ったり、新しい気づきに出会ったりするための「手がかりとしてのリソース」なのだと思います。

子供たちのリアルなつぶやきや動きによって、用意していた計画が良い意味で裏切られ、形を変えていく。そして、その場のやり取りの中で、子供たち自身の学びがおのずと走り出す。こういった事態こそが、私たちが目指している「中動的な学び」における本当の面白さではないでしょうか。

本日行った2年の「ドッキングロボ」の授業でも、他クラスでやれば全く違う展開（ライブ）になったはずだと強く実感させられました。だからこそ私たちは、そうしたクラスや子供一人一人に伴走し、その場で授業を創り上げていく必要があります。

少なくとも、教育実習生には、目の前の子供の実際を無視して、ただただ計画をこなす状態にはなってほしくありません。子供と一緒に「次はどうしようか」とワクワクする、伴走者としての楽しさを味わってほしいと願っています。

（木村 仁）